〈報告〉

文部科学省　産業界のニーズに対応した教育改善・充実整備事

中部圏の地域・連携を通した教育改革力の強化

―― 平成26年度の実践報告及び3年間の成果 ――

目　黒　達　哉

はじめに

平成24年9月20日に、本学社会福祉学部は、文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に『前に踏み出し、考え抜き、チームで社会と結びつく教育力の成長』というテーマで、三重大学を幹事校として中部圏の25大学で応募したところ選定された。本学部では選定されると同時に産業界ニーズ委員会を立ち上げた。なお、平成26年度でもってこの事業は終了した。3年間、この委員会を中心に事業を展開してきた。

ところで、「社会人基礎力」という用語がある。「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されている。「社会人基礎力」は、「職場や地域社会で様々な人々と仕事をしていくために必要な基礎力」として、経済産業省が2006（平成18）年から提唱している。企業や若者を取り巻く環境の変化により、「基礎学力」、「専門知識」に加え、それらをうまく活用していくための「社会人基礎力」を意識的に育成していくことが今まで以上に重要になってきている。

この社会人基礎力を、本学社会福祉学部では「福祉実践基礎力」と表現している。福祉実践基礎力とは、「心が動く力」、「じっくり考える力」、「共に生きる力」の3つの能力（13の能力）から構成されている。「福祉実践基礎力」は、本学の建学の精神である『同朋和敬』の精神の社会福祉現場に具現化する要素として重要であると考えている。

この3年間、私たち教員もより以上に福祉業界のニーズを把握し、かつ育てたい学生の資質を明確にし、学生の福祉実践基礎力を高めるための努力をして来た。本報告書では、平成24年度、平成25年度、平成26年度と3年間にどの程度福祉実践基礎力が高まったのかを検証したい。

Ⅰ 取組の目的

1．取組全体の目的

本補助事業全体の目的は、育成を目指す人材像に関する大学と地域・産業界との対話不足という課題に対応し、中部圏における人材養成に資するため、23大学が企業、経済団体、行政機関、教育機関と対話を進め、学生に地域・産業界のニーズに対応した能力を育成する教育改革力を強化することである。

また、上記目的を達成するため、取組テーマとして「①アクティブラーニングを活用した教育力の強化」「②地域・産業界との連携力の強化」を設定した。①は、参加大学が自らの理念に従って育成すべき資質と、地域産業界が必要とする資質に関して、社会人基礎力を共通の土俵として、中部圏産学連携会議での対話を通して検討すること、および学生参加型授業、共同学習、課題解決型学習やPBLを通した学生の能動性育成を図るものである。②は、地域・産業界との連携によるインターンシップの高度化や、地域・産業界との連携による授業の開講をすすめるものである。

以上の取組を、中部地域大学教育改革推進委員会がとりまとめ、連携FD

を通した事業の成功及び失敗の共有や、中部圏産学連携会議の開催、評価の実施を通して、中部圏における地域・産業界のニーズに対応した人材養成に向けた教育改革の改善・充実機能を図ることが、本補助事業の目的である。

2．平成26年度の目的

本補助事業の本年度の目的は、平成26年度の事業の活性化はもちろんのこと、平成24年度から平成26年度までの3年間の事業成果と評価の実施である。

具体的には、成果としては、①失敗事例からの学び、②産業界（福祉業界）のニーズを把握し、スムーズな就業につなげたか、③教員のアクティブラーニングを活用した授業の状況を把握し、福祉実践基礎力の高まりの評価、④教員の育成した資質の把握、⑤インターシップ不参加学生の把握からさらなる強化への視点である。

また、活動評価としては、①アクティブラーニング／インターシップの強化、②地域・産業界のニーズの把握と反映の視点である。

Ⅱ　同朋大学社会福祉学部の取組

現在まで、本学部では、まず初年次ゼミにおいてゼミ単位でのディベートやプレゼンテーションおよびフィールドワークを行って、能動的で自律的・自立的な学習態度の育成に努める。そして、2～4年では、演習やゼミにおいて、さらに能動的な学習ができるよう促してきた。また、学外研修での施設見学やボランティア論、ボランティア活動などでの実体験をして、地域や福祉業界との連携を深めている。そして、円滑な学習を進めるためにアドバイザリー制度で補完している。そこで、本事業では、今までの個々の教育改善を入学前プログラムと初年次教育の連結のための教材を作成・利用する有機的結合、講義科目での学生参加型授業の拡大、演習科目での共同学習の拡

大と問題解決能力の育成、および講義・演習・実習科目との有機的結合を行うことにより、教育改革を全教員がチャレンジしてチームで働いて実施をしている。

このような取組により、従来の学士課程教育を活性化させ、学生の学習意欲の高揚をもたらし、本取組の目的である産業界（社会福祉現場）のニーズに対応した高度な専門性と実践力を身につけた福祉人材を育成できる。

そこで、本学部の学生が社会的・職業的に自立し、産業界のニーズに対応した人材となるための具体的な教育改革の内容は次のようになる。

１．アクティブラーニングを活用した教育力の強化

社会福祉従事者を目指す学生が学ぶ必要のある社会人基礎力（「前に踏み出す」「考え抜く力」「チームで働く力」）の構築のための初期段階として、「社会福祉入門」のテキスト作成し、初年次教育の基礎ゼミ等で活用する。

２．地域・産業界との連携力の強化

（１）地域の産業界と連携した実学的専門教育の導入

社会福祉現場と連携して、以下のようなニーズを反映させる社会福祉専門教育を実施する。

①福祉業界のニーズを把握のための意見交換会（精神保健福祉、介護福祉など）

②社会福祉現場のOB・OGとの連携による現状理解とニーズ把握「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉学部卒社会福祉関係従事者のつどい」「若手OB・OG研究会」

③保育現場のニーズに対応した保育者養成「実践力を高めるキッズカレッジ」

④特別講義「産業界のニーズに対応した社会福祉教育」（年４回シリー

ズ）

⑤地域ニーズに応えるための「気軽に立ち寄れるボランティアサロン」

⑥地域ニーズに応えるための「誰でも参加できるＳＳＴ」

⑦産業界との協働による「精神障害者サポートプロジェクト」

（２）産学連携授業の実施

社会福祉現場で活躍している福祉実務家等と連携した実学的な科目を運営する。

①キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱ、②ボランティア論、③ボランティア活動、④国際ボランティア論、⑤NPO・ボランティアマネジメント総論、⑥NPO・ボランティアフィールドワーク、⑦傾聴活動論、⑧その他（実務家を招聘する科目）

（３）地域の産業界と連携した実践的なインターンシップの実施

地域の社会福祉施設、NPO法人、NGO団体、ボランティア団体等と協働・連携し、より実践的な内容のインターシップに質的な変更を行う。

①インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

以上のような（１）～（３）の取り組みを有機的・体系的に組み合わせながら、産業界のニーズに対応した人材の育成を図る。さらに、地域の・産業界との連携強化を推進し、その成果を検証するために、グループ内の分科会やグループ全体の産学協働連携協議会において本学の取り組みの成功体験、失敗体験を報告する。また、他大学の取り組みを共有し合う中で共通理解をし、さらなるチャレンジに向けて取り組みの質の向上を図る。

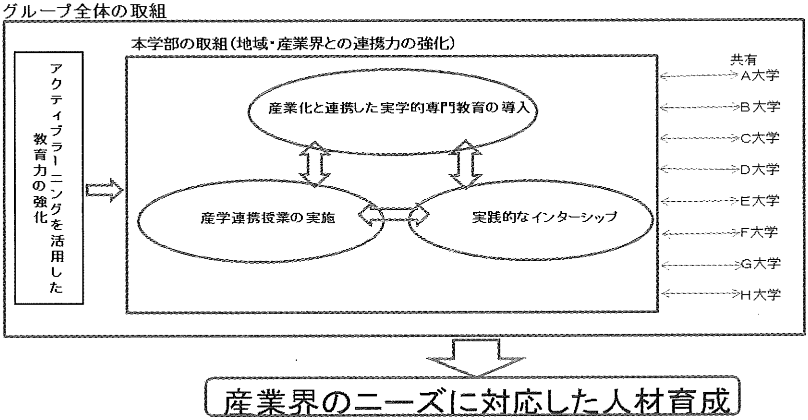


図１　グループ全体の取組と本学部の取組との関連性

Ⅲ　取組の実績

＜アクティブラーニングを活用した教育力の強化のための取組＞

１．「社会福祉入門　第2版」の作成

○実　績

今年度（2014年度）は、新任教員や担当科目変更などがあり、内容を刷新し、さらに社会福祉士国家試験の出題形式に沿った「アセスメントテスト」（5択50問）を作成した。また、社会福祉士国家試験と同じような5択の文章題で、出題数が50問であった。今年度は、全学年の平均点は4割強で、１～3年生の平均点は4割前後である。4年生の平均点は少し高く4割5分ほどであるが、これは社会福祉士国家試験を受験する学生が点数をあげているようである。1～3年生は、このアセスメントテストを受験して、自分の知識量と文章理解能力などを把握することができたようで、学修の目的意識が高まってきたと感じる学生が増えたようである。

○成　果

今年度は、テキストを刷新し、従来通り専任教員が作成した。また、5択のアセスメントテストも各教員が作成し、今まで以上に教員の積極的参加がみられた。そして、学生も基礎学力や専門知識の習得状況が上昇しているようである。これらの背景には、以下のことが考えられる。

（1）専任教員の意識の変化

（2）基礎学力のボトムアップと向上

＜地域・産業界との連携力の強化のための取組＞

1．福祉業界のニーズを把握するための意見交換会

―介護福祉士養成のための実習懇談会―

「福祉業界のニーズを把握のための意見交換会」

介護福祉士養成のための実習懇談会

○実　績

平成27年2月9日（火）　15時30分～17時

施設側より17施設21名の現場指導者および管理職、大学より6名参加となる。

○成　果

「記録の苦手な学生」「学生の個性に応じた指導」「学生によって介護技術の習得度のバラツキがある」「宿泊実習の学校の位置づけ」等についての意見交換・学校側より回答する。施設により、様々な立場から意見交換でき、学生の起用行く上で貴重な指導者の意見を取り入れる指導をするように教員も新たな気持ちをもつことができた。

2．若手OG・OB研究会

○実　績

1)第1回 2014年6月21日(土)研究会　2)第2回 2014年7月13日(日)研究会
3)第3回 2014年9月7日(日)研究大会　4)第4回 2014年11月15日(土)研究会
5)第5回 2015年1月28日(水)研究会　6)第6回 2015年2月7日(土)研究大会

○成　果

研究会は各回6名前後のメンバーが参加し、前半は話題を出し合い、後半はその話題の中から主題を２題決め『ワールドカフェ』にて話の集約をした。

第1回の研究大会は福祉レクリエーション研究会との合同大会として実施した。

ここには30名ほどの参加者があったのだが、福祉現場で働く仲間たちに『ワールドカフェ』を紹介できたことと、「レクリエーションを通した子どもの育ち」「児童養護施設でのレクリエーション」という題での話し合いは良かった。

第2回研究大会は前半を研究会、後半を研究大会として実施した。現場から海野氏、大橋氏の2名に講演をお願いした。海野氏は「新人職員の悩みと希望」という題で、働き始めて1年間の思いを話された。自分は子どもたちに励まされ、子どもたちとの関わりの中から仕事の楽しさを見つけているとのことだった。大橋氏は「支援のためのアセスメントと児童福祉分野の現状」という題で話された。児童福祉分野の現状や「子ども子育て支援法」に関して、障害児施設の今後の方向性や里親制度の拡充施策の問題点などについて話された。今後は、この会の成果を授業の中で学生に直接伝えていくことができないか模索していきたい。

3．実践力を高めるキッズカレッジ

○実　績

【平成26年度キッズカレッジ実施報告】

開催合計		参加組数合計	参加親子人数合計
前期	17回	301組	666人
後期	15回	242組	525人

○成　果

（1）乳幼児の発達に合った室内環境づくりを工夫し、仲間と共に設定をした。その結果、親しみやすい雰囲気や遊びやすい環境を仲間と共に工夫する姿が見られるようになった。

（2）学生は、参加する子ども一人ひとりにあったおもちゃやの選び方や設定の仕方などの必要性を学べた。

（3）学生は仲間と共に、参加する子どもが自分で遊びに関わり、主体性を発揮できる環境設定をしようと話し合う姿が見られるようになった。

（4）学生は、子どもの遊び相手となり、子どもと遊んだり、優しく寄り添ったり、親や地域の支援者と気軽に話したりし、親子支援のスキルを身につけた。

（5）学生・親子・地域の支援者が互いに交流し、子育て支援の方法を工夫しあえるようになった。

4．特別講義「産業界ニーズに対応した社会福祉教育」

「産業界のニーズに対応した社会福祉教育（1）」

ヒューマンケアヒース「老人ホームにおいて大切にしていること」

○実　績

有料老人ホーム「あんしんせいかつ葵」の中島加織施設長の講演。

平成26年9月30日(火)　10時40分～12時10分　出席者　学生 21名

○成　果

女性として社会人の先輩から、努力すれば施設長になれることを語られると、学生たちは一様に改まった表情となった。具体性のある話を優しく話していただいたこともあり、熱心に質問し、意義のある講演であったとの声がみられた。

「産業界のニーズに対応した社会福祉教育（2）」

ヒューマンケアアヒース「老人ホームでの学び、施設リハビリテーションと口腔ケア」

○実　績

有料老人ホーム「あんしんせいかつ葵」の中島加織施設長の講演。

平成26年10月14日(火)　10時40分～12時10分　出席者　学生 ２１名

○成　果

学生は、施設での半日研修を終えて数日後であったこともあり、介護福祉士等の福祉職として高齢者を尊敬し、守り気持ちが強くなったようである。具体的で、優しく温かい語り口調で話していただいたこともあり、講義後個別で質問する者もおり、意義深い講演であった。

「産業界のニーズに対応した社会福祉教育（3）」

ヒューマンケアアヒース「救急時の対処法」

○実　績

日本赤十字社愛知県支部の指導員を招き、デモ器を用い受講者全員が救急蘇生法の演習をし、実技を身につける。

平成27年1月29日(火)　18時～19時30分　出席者　学生 １６名

○成　果

学生は４名１組で全員が体験した。時間は９０分と短い間であったが集中し、熱心に取り組んだ。

「産業界のニーズに対応した社会福祉教育（4）」

ヒューマンケアヒース「多様なフィールド実習の目的と課題」

○実　績

教員養成の中で学校以外の多様なフィールドを実習としてとらえ愛知教育大学大学院での取り組みを聴き福祉職の実習との共通項を模索する。

平成27年2月9日(月)　17時～18時30分　出席者　学生 １６名

○成　果

学生は４名１組で全員が体験できた。時間は９０分と短い間であったが集中し、熱心に取り組んだ。

「産業界のニーズに対応した社会福祉教育（5）」

特別講義「心理学コース」

○実　績

特別講義「心理学コース」

平成27年1月9日（金）２限（10時40分から12時10分まで）、J603教室

講師：光崎祐美先生（社会福祉法人照徳会　照徳愛育園　心理士（認定心理士））

テーマ：「児童養護施設における心理士について」

○成　果

児童福祉分野で求める人材像として、子どもが好きだけではなく、よく動ける人材を求めているとう話があり、学生にとって参考になった。また、講義終了後、講師を囲んで数人の学生が質問などコミュニケーションを図る場面が見られ、関心の高まりが見られた。

５．気軽に立ち寄れるボランティアサロン

○実　績

社会福祉法人名古屋市中村区社会福祉協議会中村ディサービスセンターの

利用者（高齢者）が月1回（平成26年4月～平成27年3月）、約2時間程度、来学する。職員も1名同行する。

ボランティア活動の事前準備・フォローアップの実施

活動①～④の前日お昼休み（12時30分～12時55分）に、事前打ち合わせと高齢者に渡すメッセージカードの作成を行った。また各回の終了直後に、学生のフォローアップを実施し、うまくいった点、課題点について発表し合った。

○成　果

学生は今回のボランティア活動の授業を通じて、1年生は福祉実践基礎力の構築にむけての初歩的な学びができたと考えられ、2年生、3年生は福祉実践基礎力が

昨年度よりも高まったと考えられる。

6．誰でも参加できるSST

○実績

日時：2015年2月25日（水）　13時15分～16時00分

（「誰でも参加できるSST」は14時30分まで）

会場：博聞館２０３教室

講師：岩崎貴子さん（東京都練馬区社会福祉協議会）

グループには学生の他，当事者，ボランティア，専門家など33名が参加した.

SSTの手順にそって２名の参加者が自分の課題で練習を行い，講師には主にその進行をお願いした.

○成果

この事業に参加する学生は，主に精神保健福祉課程の学生である．精神障害をもつ当事者への接し方だけでなく，その方が話す言葉からアセスメント

を行い，適切なSSTの練習課題へと導くソーシャルワーカーのスキルを学ぶことができた.

7．精神障害者サポートプロジェクト

○実　績

（1）日時：2014年7月17日（木）　10時40分～12時10分

会場：成徳館７０６教室

講師：NPO法人よすが　障がい福祉サービス事業所いーばしょ

管理者・精神保健福祉士　野田盛二さんとメンバー３名

（2）日時：2014年11月13日（木）　10時40分～12時10分

会場：成徳館７０６教室

講師：NPO法人アダージョちくさ　精神保健福祉士　富田倫弘さんとメンバー８名どちらの会もメンバーの皆さんから，病気になってからこれまでのご自身の体験を語っていただき，それに対して学生が質問をしながら交流を深めた．１回目はメンバーから，病気や障害をかかえながらも仲間とともに前向きに生活していることを伝えていただいた．それを聞いた学生からは，抱えている悩みは自分たちと変わらないことや，家族や仲間の支えがとても大事であることがわかったなどの感想が聞かれた．２回目は「精神障害者に対する偏見の変化」をテーマにグループ研究をしている４年生より，自分たちの考えをメンバーの皆さんに伝え，そこから意見交換を行った．とても率直な考えや気持ちの交流ができ，いずれメンバーと学生が共同で何か企画してみようということになった.

○成　果

学生にとって，当事者の話を直接聞くことは大きな意味があった．自分が想像していたことと異なることにも多く遭遇したようである．また当事者から「共同で」と呼びかけられたことに対して，学生として何ができるか考える機会にもなった．そして2015年3月15日（日）に千種区区役所講堂で開

催された，NPO法人アダージョちくさ主催「精神保健福祉講演会」をボランティアとして手伝うことにつながった．この講演会でも数名のメンバーが一般市民を対象に「私って病気！？」と題して語っており，学生たちはその様子や内容からさらに気づきを深めることができた．

8．キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱ

○実績

前期、後期の水曜日2限。社会福祉祉現場で活躍されている同朋大学社会福祉学部のOB・OGを招聘し、福祉業界のニーズに応える人材育成を目指す講義である。児童福祉、障害者福祉、高齢者福祉、精神保健福祉、教育、国際、心理の各分野で活躍されているOB・OGを招聘し、講義を拝聴し、またOB・OGとコミュニケーションを図る場とする。

○成果

講師の先生方のお話はたいへん分かり易く、学生が今後の大学での学びをしていく上で参考になった。また、学生が今後の進路を考える上でも参考になった。さらには、それぞれの現場でどのような人材が求められているのかを理解することができた。

9．ボランティア活動

○実績

1）知的障害者の生活介護事業（あけぼの作業所の利用者と学生の交流会）

「ボランティア活動A」の授業時間内で事前学習・準備、事後学習（フォローアップ）を実施した。尚、活動の実績は以下の通りである。

①平成26年　7月　5日（土）10時～15時、同朋大学で学生が企画・立案したレクリエーションによって実施された。

②平成25年11月22日（土）10時～15時、あけぼの作業所で学生が企画・立案したレクリエーションによって実施された。

2）世代間交流事業（稲葉地学区老人クラブ連合会と学生の交流会）

「ボランティア活動A」の授業時間内で事前学習・準備、事後学習（フォローアップ）を実施した。尚、活動の実績は以下の通りである。

①平成26年10月5日（日）9時～16時、同朋大学で学生が企画・立案したレクリエーションによって実施された。

3）環境美化ボランティア活動（荒輪井保育園・中村土木事務所との連携・協働事業）

「社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ」「総合演習Ⅰ・Ⅱ」の授業時間内で事前学習・準備を、事後学習（フォローアップ）を実施した。荒輪井保育園の園児が利用する稲西公園の清掃活動（落ち葉拾い）とその後保育園の園庭で学生が企画・立案したレクリエーションを実施した。尚、活動の実績は以下の通りである。

①平成26年11月13日（木）10時40分～11時10分、学生が保育園を訪問し、園児に環境美化ボランティア活動の説明を実施する。

④平成26年11月20日（木）10時～12時、稲西公園において環境美化ボランティア活動の本番を実施した。園児が清掃活動（落ち葉拾い）をするのを学生がサポートした。保育園の園長、保育士、また土木事務所職員の協力を得た。

4）ボランティア活動フォローアップの実施

平成27年1月21日（水）16時20分～17時50分、同朋大学において、社会福祉学部のOBで小牧市民生・児童委員の丹羽正雄氏を講師としてお招きし、今年度のボランティア活動の総括とコミュニケーション能力の向上のための学習会を実施した。

○成果

事後学習（フォローアップ）の授業における体験発表やアンケート調査から、学生は今回のボランティア活動の授業を通じて、福祉実践基礎力が高まったと考えられる。

10. 国際ボランティア論、NPO・ボランティアフィールドワーク

○実　績（注：実績と成果は、それぞれの番号に呼応している。）

①事業企画（1）と実践：　2014年9月6日（土）に、『外国人の子どもたちの一日キャンプ』を、名古屋市の戸田川緑地公園で開催した。

②事業企画（2）と実践への参加：　同朋大学の学生ボランティアたちとその友人30人余りが、名古屋市中村区の「人権尊重のまちづくり事業」の協力を得て、国籍や年齢などの垣根を越えた地域の方たちとの交流を、『なかむら　クリスマスパーティ』という形で企画・実践した。12月20日（土）に同朋大学の施設を使って行われた。

③講義（1）：国内の国際社会福祉問題として、今年も愛知県に在住する外国人の生活や医療、教育、言葉や習慣などの違いから起こる誤解や摩擦などによる差別や偏見などの諸問題に焦点をあてた。

④講義（2）：グローバルな国際社会福祉問題やボランティアを考えるきっかけ作りのために、今年も開発途上国でフォトジャーナリストとして活躍する方をお招きし、彼女が特に力を注いでいるアジアの政治や経済、社会の実態、そこで生きる人々の生活や貧困、環境問題についての生々しい実体験を、スライドや映像を駆使しながら語っていただいた。

⑤講義（3）：昨年3月までの3年間、タイのインターナショナルな幼稚園で教鞭をとっていた同朋大学の卒業生をお招きし、国際ボランティア論の受講生や国際社会福祉を学ぶ主に3～4年生の学生たちに、現地での具体的で詳細な仕事の内容や生活、子どもたちの様子、タイの現状などを語っていただいた。

⑥校外学習（1）：2015年1月16日（9時00分～17時30分）、JICA中部、名古屋朝鮮初級学校（小学校・幼稚園）、名古屋国際センターの3施設訪問を実施した。

⑦校外学習（2）：ボランティア・NPOマネージメント論を2014年前

期に受講した学生や新規の受講生たちによるフィールドワークを行った。今年度は、受講生が予想以上に多かったため、大学以外での外部機関での研修という従来の形を変更し、大学内・周辺での実践を含んでの学びとした。2015年1月23日にそれぞれの学生の報告会を行い、問題点や課題を含めた議論と評価を実施した。

○成　果

①昨年の中心となった現4年生不在の中、新1年生を加えた2年生約20人が、連日苦労を重ねて、更なる成長を見せてくれたことは、大いに評価したい。

②1～2年生の学生を中心に、昨年の『世界の子どもフォーラム』や9月の『外国人の子どもたちによる1日キャンプ』での経験と反省点を活かし、ダイナミックな企画をやり遂げたことは、必ず彼らの将来に様々な側面で生かされるのではと考える。

③在住外国人の抱える問題を当事者から語っていただいたことで、学生たちにはその深刻さや実態等がストレートに伝わったようである。

④多くの危険や困難が満ち溢れる開発途上国の現場で、体を張っての取材などを続ける若い女性フォトジャーナリストの姿に、昨年同様、学生たちは心を打たれた。今後の自らの生き方や自分たちに出来ることを考えるきっかけになったのではないかと思う。

⑤在学生たちは、“残りの学生生活の有効な過ごし方”や、“今後の自らの進路や生き方”にも思いを巡らし、さっそくこの春休みに実践に移した学生もいたことは、うれしい変化である。

⑥昨年とほぼ同じ様なルートをたどっての丸一日学外研修であったが、名古屋市の、しかも大学の近くに国際関連の施設があることすら知らなかった学生たちにとっては、実際の訪問は非常に意義のあるものであったようである。

⑦大学内や周辺地域を歩き回り、或いは学生たちや職員、地域の人たち

に話を聞き、身近な社会問題を探り出し、それぞれのテーマを設定するということは、学生たちにとって初めての経験だった。このすべての過程が、大学における“自分の研究”すなわち卒業論文に結び付く貴重な礎、そして学びになったのではないだろうかと考える。

11. 傾聴活動論

○実績

1）受講学生　11名

2）実施日時

平成26年7月18日（金）1限は、いなべ市社会福祉協議会の話し相手ボランティア（傾聴ボランティア）養成講座を修了し傾聴活動をしている2名の社会人特別講師と担当職員1名を招いて講義を拝聴した。

○成果

この講義から学生は傾聴士とは何かについて理解でき、役割も知ることもできた。また、傾聴士はもともと「傾聴ボランティア」にその起源があり、「ボランティアとは何か」もしっかり理解することができたとともに、これまでの傾聴ボランティアがどのような社会貢献活動をしてきたのかを知ることができた。

12. その他（実務家を招聘する科目）

○実績

平成26年4月7日から平成27年2月9日にまでの講義期間の主に水曜日の2限、木曜日の2限で、専任教員18名のうち、14名がゼミの時間内に1回、各界の実務家を招聘しゼミを実施した。

○成果

・ゼミでの実施であったため、少人数であり、学生は実務家を身近に感じることができた。

・実務家の業務内容を知ることができ、就業へのイメージを深めることができた。

・実務家の話から現場で起こっていることと大学で学んでいることを多少なりともつなげることができた。

12. インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

○実績

インターンシップは、目的に応じていくつかの類型に分けることができるといわれている。大別すると、（1）職場体験型、（2）課題解決型、（3）実務実践型、（4）採用直結型という分け方がある。

社会福祉学部では社会福祉現場実習、教育実習やボランティア活動などがインターンシップに該当すると言える。社会福祉現場実習、教育実習は「（3）実務実践型」に該当し、ボランティア活動は「（2）課題可決型」に該当すると考えられる。

本学では、インターンシップをこのような基本的な考え方に基づいて参加学生数、参加率の現状を把握した。

平成26年度（平成27年1月27日現在、全学生総数995名）の本学1年生から４年生までのインターンシップ参加学生人数は284名で参加率28.5％である。まだ一度もインターンシップを経験していない学生が72.5％いるため、平成27年度は参加率で50％を目標にしたい。なお、この数値は一人につき一カ所にいった場合に1回をカウントしている。複数箇所いった場合でも1回のみカウントしている。延べ人数ではない。

○成果

・指導者の指示や注意事項を踏まえたうえで、具体的な経験を整理し、記録をまとめることができた。

・自分の成果、反省点を求めることができた。また、今後の学びのために自己の課題点を明確にすることができた。

目 黒 達 哉

Ⅲ　同朋大学社会福祉学部の福祉実践基礎力とアクティブラーニングについて

1．産業界のニーズの把握

図1は、キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱや特別講義などで招聘した福祉業界を中心に産業界で活躍されている学外講師に、同朋大学社会福祉学部の福祉実践基礎力を基準として、産業界のニーズを把握するために行ったアンケートの単純集計である。

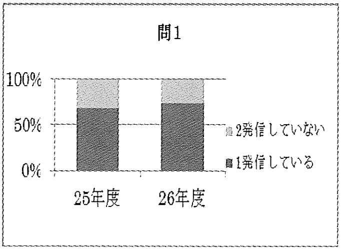
まず、「問1『求める人材像』を具体的に明確化し、独自の用語で表現して発信している」に「発信している」と回答していただいた学外講師は平成25年度は28名（68.3%）で平成26年度は14名（73.7%）であった。学外講師が活躍されている両年度とも約7割の事業所などは、独自の言葉を用いて若者に対して「求める人材像」を表現していて、かなり意識が高いと考えられる。

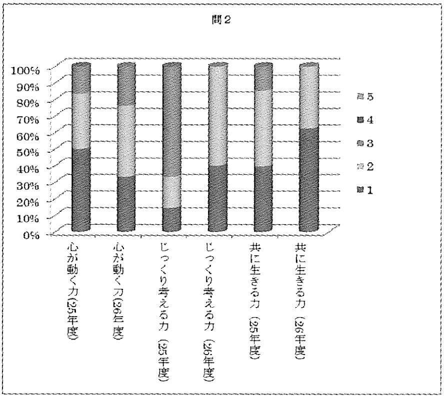
次に、「問2　求める人材像との関係が深い能力について、1位～3位の順位をつけてください」に1位と回答したのは、「心が動く力」が平成25年度は24名（50.0%）で平成26年度は7名（33.3%）、「共に生きる力」が平成25年度は19名（39.4%）平成26年度は10名（62.5%）、「じっくり考える力」が平成25年度は7名（14.6%）で平成26年度は4名（40.0%）あった。福祉業界を中心とした産業界では、平成25年度は「心が動く力」を重視しているようであるが平成26年度は「じっくり考える力」や「共に生きる力」を重視しているようである。

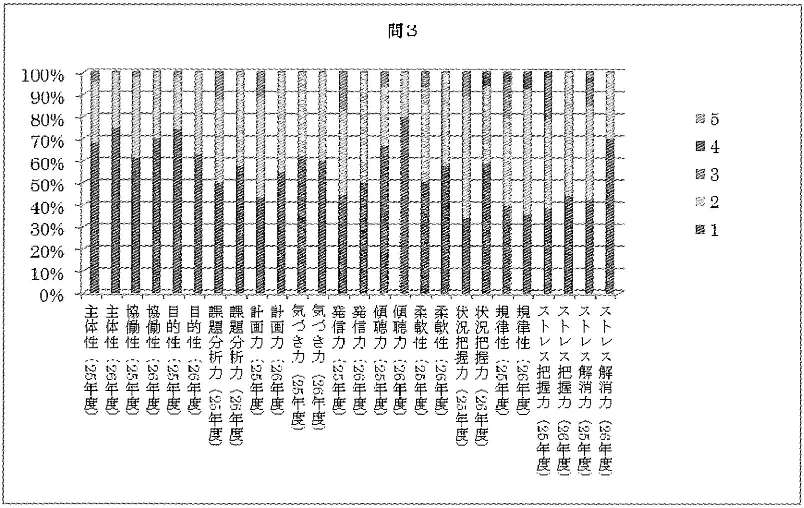
そして、「問3『求める人材像』について、5つの選択肢から回答してください」の回答より、全体的に求められる要素ではあるが、特に「主体性」、「目的性」、「気づき力」、「傾聴力」が高い割合で求められている。

しかし、「問4　29歳までの若手社員に「不足が見られる能力」につい

て、5つの選択肢から回答してください」の回答より、福祉業界を中心とした産業界が求める人材像と実際の若手社員の能力については、大きなギャップを感じているようである。特に、「主体性」、「気づき力」については、高い割合で産業界が求める能力であるにもかかわらず、不足が見られる能力の中心と考えられており、若手社員の能力との間に大きなギャップが生じているようである。







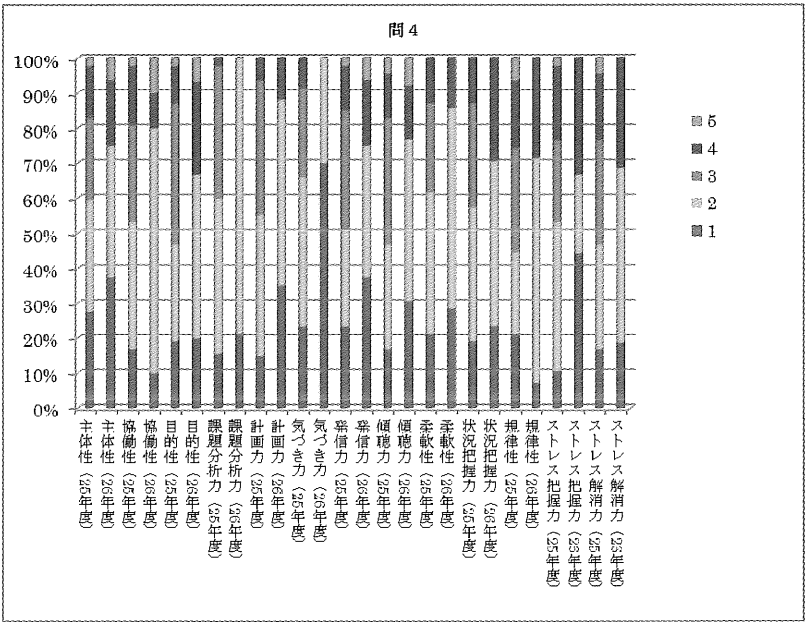


図１　産業界のニーズの把握に関するアンケート（学外講師：単純集計）

２．キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱの受講生アンケート

図2は、同朋大学社会福祉学部のＯＢ・ＯＧを招聘して開催されたキャリア支援講座Ⅰ・Ⅱを受講した学生のアンケート結果である。キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱでは、ＯＢ・ＯＧたちが学生だったころにどのような活動をし、今の勤務先にどのような理由で就職したのか、そしてキャリア形成をどのように行い、その産業界ではどのような人材が求められているのかを講義していただいた。

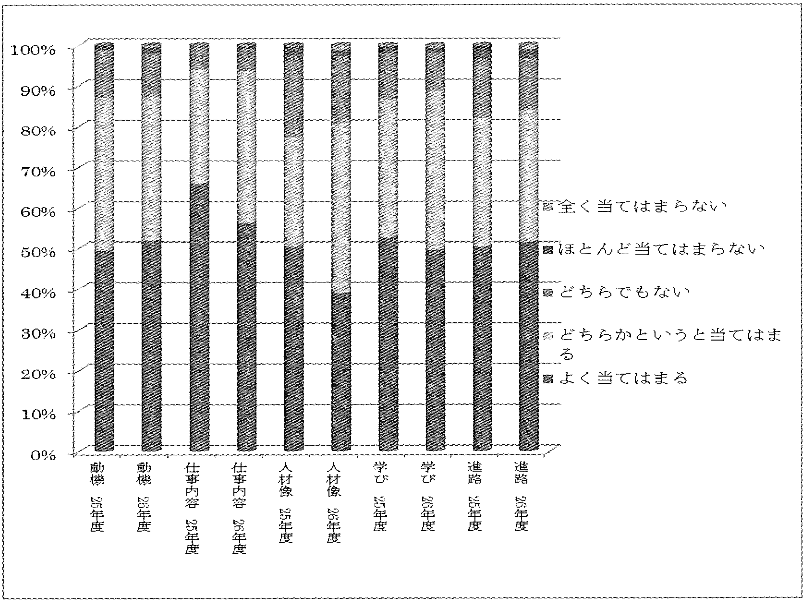


図２　キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱの受講生アンケート（単純集計）

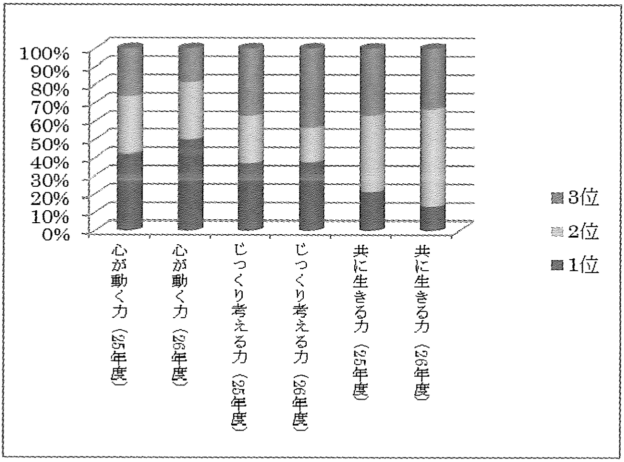
他大学や産業の方ではなく、同じ大学の同じ学部卒業者の生の声を聞くことができ、学生と密着した有意義な情報が伝えられたことが、大きく寄与した。

しかし、企業が求めている人材像をあまり理解できなかった受講生が平成25年度は少数いたが平成26年度は多くなった。これは、求める人材と、学生たちの意識とのギャップがあるためかもしれない。ただし、先輩たちの仕事内容がよく理解できたために、大学での学びを考える上で大いに役立ったようである。

3．教員の養成したい資質

図３は、社会福祉学部の専任教員（除く特任教授）に対して育成したい資質について尋ねたアンケートの単純集計である。

問１



問２

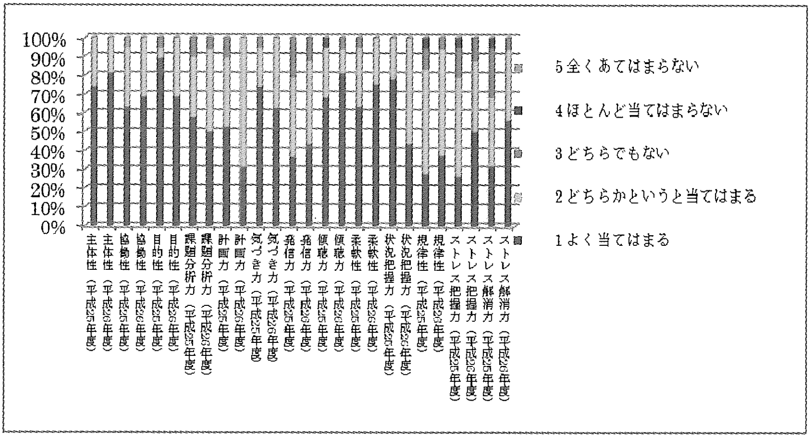


図３　教員の育成したい資質（専任教員：単純計算）

まず、「問1　求める人材像との関係が深い能力について、1位～3位の順位をつけてください」に1位と回答したのは、「心が動く力」が平成25年度は8名（42.1％）で平成26年度は8名（50.0％）、「じっくり考える力」が平成25年度は7名（36.8％）で平成26年度は6名（37.5％）、そして「共に生きる力」が平成25年度は4名（21.1％）で平成26年度は2名（13.3％）であった。表１と比較すると、福祉業界を中心とした産業界では、「心が動く力」をともに重視しているが、次に産業界では「共に生きる力」を重視しているが、教員は「じっくり考える力」を重視している。ここに、産業界と教員とのギャップが見られるようである。

そして、「問2『求める人材像』について、5つの選択肢から回答してください」の回答より、全体的に求められる要素ではあるが、特に「主体性」、「目的性」、「気づき力」、「状況把握力」が高い割合で求められている。図1と比較すると、教員は産業界よりも「状況把握力」を強く重視しているようである。このことが、教員が「じっくり考える力」を重視する要因になっているようである。

４．教員のアクティブラーニング実施状況

図４は、社会福祉学部の専任教員（除く特任教授）に対してアクティブラーニングの要素や類型の項目を授業で実施したかどうかについて尋ねたアンケートの単純集計である。

19名の専任教員全員が、なんらかのアクティブラーニングの項目を授業で実施している。特に、「学生参加型授業」、「共同学習を取り入れた授業」そして「フィールドワーク」を実施して、より実践的な授業展開をしている教員が多い。これは、社会福祉学や子ども学など、人を相手としたより実践的な学問分野であるため、専任教員は学生が能動的に学ぶよう配慮した授業展開に努めて、学生に福祉実践基礎力を高める授業や課外活動をしているようである。

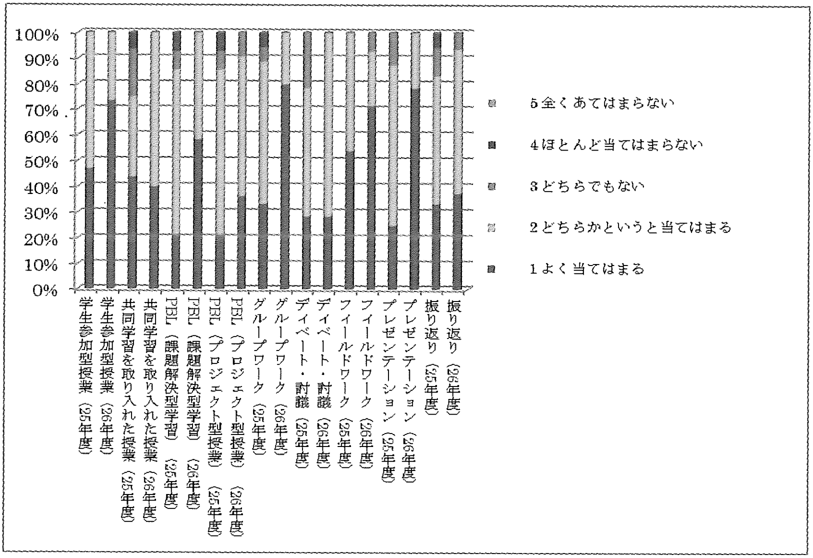


図３　教員の育成したい資質（専任教員：単純計算）

5．福祉実践基礎力の測定

表１　福祉実践基礎力の概要

	社会性	領域	同朋大学社会福祉学部の「福祉実践基礎力」3つの能力／13の能力要素	社会人基礎力
			（技術的能力（基礎学力、専門知識））	
3つの能力	個人的	情意	心が動く力（主体性、協働性、目的性）	前に踏み出す力（主体性、働きかけ力、実行力）
		認知	じっくり考える力（課題分析力、計画力、気づき力）	考え抜く力（課題発見力、計画力、創造力）
	社会的	情意 認知	共に生きる力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレス把握力、ストレス解消力）	チームで働く力（発信力、傾聴力、柔軟性、情報把握力、規律性、ストレスコントロール力）

同朋大学社会福祉学部では、通商産業省が提示した社会人基礎力をもとに、社会福祉学部の学生に必要な福祉実践基礎力を考案した。本学の社会福祉学部では、豊な教養を培って人間と社会に関する真理を探究し、社会福祉及び関連分野に関する専門知識と技能を習得して、共に生きがいのある社会の実現に寄与するための教育・研究を行っている。このような人材を育成するために、初期段階としての基礎学力や専門的知識などの「技術的能力」に加え、「３つの力」すなわち「心が動く力」、「じっくり考える力」、「共に生きる力」を必要とし、これを福祉実践基礎力と呼んでいます。詳細は表１のようになる。

この福祉実践基礎力を測定するために、「同朋大学福祉実践基礎力診断票」を作成し、年度末に１～４学年の全学生に、「学びあい×キャリアポートフォリオ（webポータルサイト）」よりweb経由で入力してもらった。

しかし、このポータルサイトの不具合により、学生が回答したデータが消失してしまい、一部の学生分の回答しかなかった。今後、プログラムの修正を行い、次年度以降の対応を行うよう予定である。

したがって、本報告では、残った解答だけで検証するため、非常に不完全な内容であることを念頭に置いていただきたい。

Q1.他の人と一緒に福祉活動することは楽しい。【協働性】

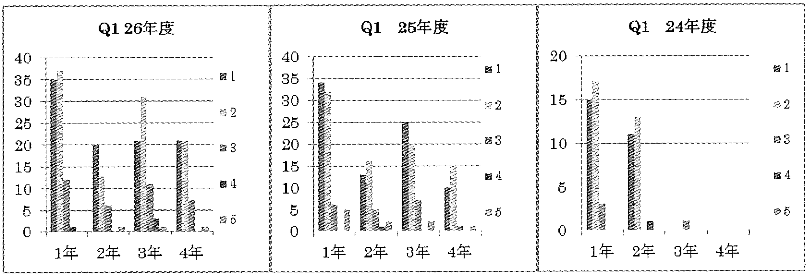


図５－１　協働性

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生が非常に多く、全体で平成24年度は56名（91.8%）、平成25年度は165名（84.6%）、平成26年度は199名（82.8%）もいた。やはり、協働性は社会福祉学部でまなぶ学生の特性と言える。

Q2.福祉活動に感動し、自分から進んで取り組むことは楽しい。【主体性】

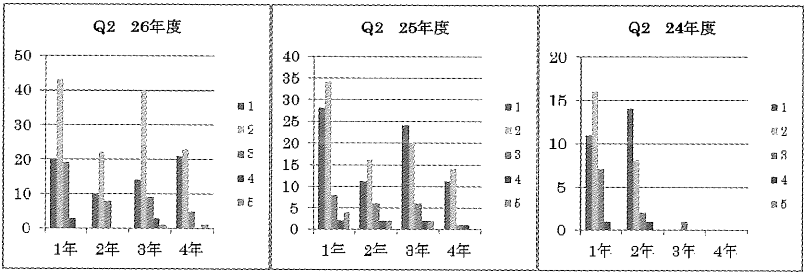


図５－２　主体性

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生が非常に多く、全体で平成24年度は49名（80.3%）、平成25年度は158名（81.0%）、平成26年度は193名（79.6%）もいた。同朋大学社会福祉学部で学び学生たちは、主体性をもった学生と言える。

Q3.目的を持って福祉活動に取り組むことは楽しい。【目的性】

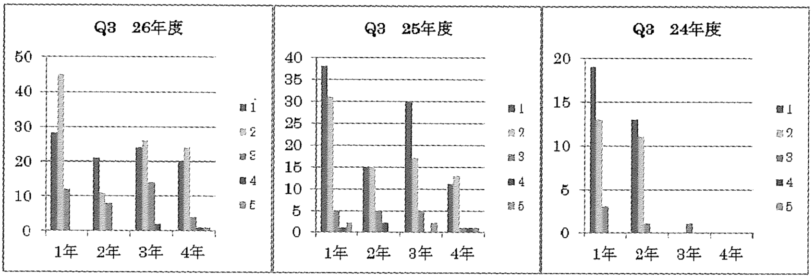


図５－３　目的性

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生が非常に多く、全体で平成24年度は56名（91.8％）で平成25年度は170名（87.2％）、平成26年度は199名（82.2％）もいた。社会福祉という目的を持った学生が非常に多いのが特徴といえる。

Q4.福祉をよく見て、自分の目的や課題を分析することは楽しい。【課題分析力】

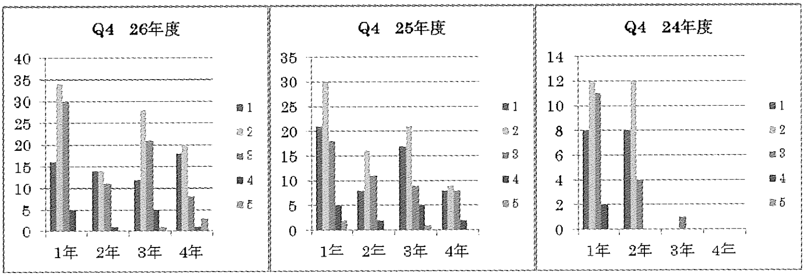


図５－４　課題分析力

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生が多く、全体で平成24年度は40名（70.0％）、平成25年度は130名（66.7％）、平成26年度は156名（64.5％）もいた。本学の社会福祉学部では、課題分析力に興味のある学生は7割近くいるが、他の質問項目と比べてやや低い方の値となっている。

Q5.福祉課題に合う方法を見つけて実行を計画することは楽しい。【計画力】

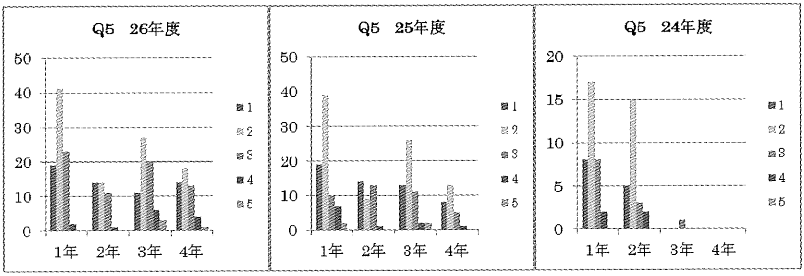


図５－５　計画力

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生がやや多く、全体で平成24年度は45名（73.7％）、平成25年度は141名（72.3％）、平成26年度は158名（65.3％）もいた。

Q6.時間がかかり困難な課題を乗り越えて、新たな気づきを得ることは楽しい。【気づき力】

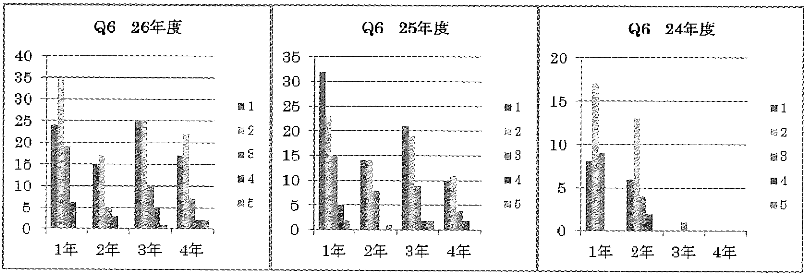


図5－6 気づき力

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生がやや多く、全体で平成24年度は180名（74.4％）、平成25年度は144名（73.8％）、平成26年度は44名（72.1％）もいた。

福祉の実践力は、まず心の動きがあり、課題を乗り越えることから生ずる「気づき」が大切である。これらの「じっくり考える力」があまり強くないのは、教育の現場では問題があると考えられる。

Q7.自分の意見をわかりやすく伝えて、他人を説得することは楽しい。【発信力】

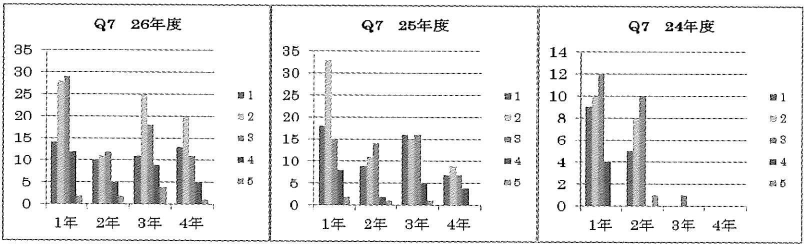


図5－7 発信力

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生がやや多く、全体で平成24年度は32名（53.3％）、平成25年度は108名（55.4％）、平成26年度は132名（54.5％）しかいなかった。特に、２年生は発信力が弱い。自分の意見を分かりやすく相手に伝え、他人を説得することがあまり得意ではない学生が多いようである。

Q8.相手の意見や思いを丁寧に聴いて、受け止めることは楽しい。【傾聴力】

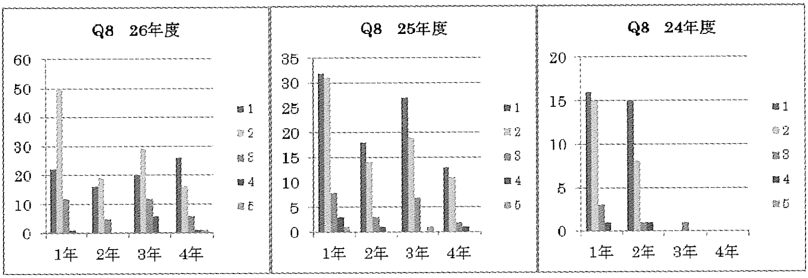


図５－８　傾聴力

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生が非常に多く、全体で平成24年度は54名（88.5％）、平成25年度は165名（84.6％）、平成26年度は198名（81.8％）もいた。やはり、傾聴力は社会福祉学部でまなぶ学生の特性と言える。

Q9.相手の意見と自分の意見との違いを気づくことは楽しい。【柔軟性】

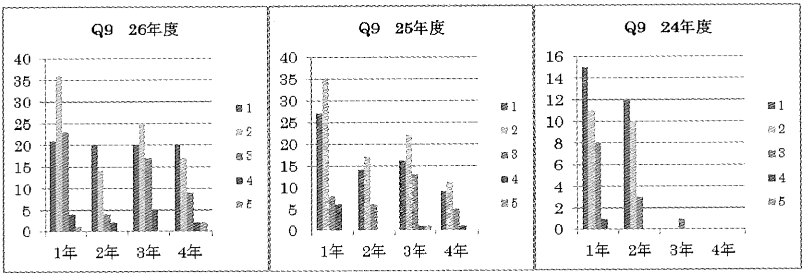


図５－９　柔軟性

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生が非常に多く、全体で平成24年度は48名（78.7%）、平成25年度は121名（77.4%）、平成26年度は173名（71.5%）もいた。相手の意見と自分の意見との違いを気づくことが、人と人とのコミュニケーションの始まりであり、社会福祉学部でまなぶ学生の特性と言える。

Q10.状況を分析し福祉課題となった原因を考えることは楽しい。【情況把握力】

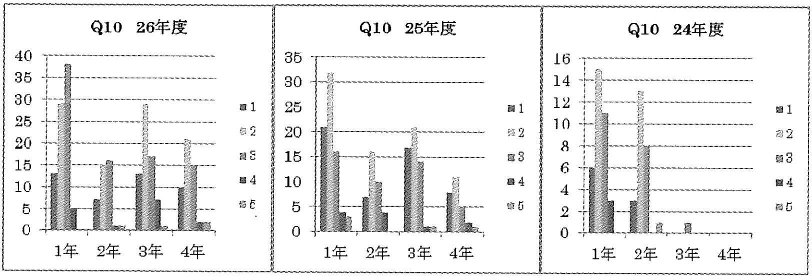


図5－10　状況把握力

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生が非常に多く、全体で平成24年度は37名（60.7%）、平成25年度は143名（73.3%）、平成26年度は137名（56.6%）もいた。状況を分析し、福祉課題となった原因を考えることは、ソーシャルワークの基本であり、社会福祉学部でまなぶ学生の特性と言える。

Q11.詳細なルールや手続き、約束などに従うことは苦にならない。【規律性】

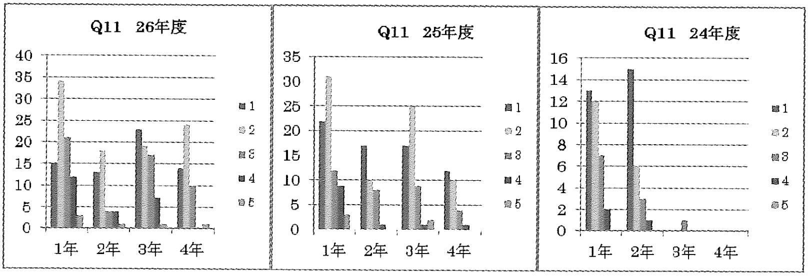


図5－11　規律性

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生が非常に多く、全体で平成24年度は46名（76.7％）、平成25年度は144名（73.8％）、平成26年度は160名（66.4％）もいた。誠実な学生が社会福祉学部には多いと言える。

Q12.自分の感じているストレスが何か分かる。【ストレス把握力】

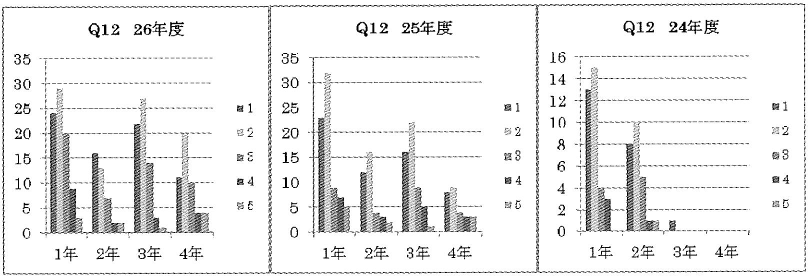


図5－12　ストレス把握力

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生がやや多く、全体で平成24年度は47名（77.0％）、平成25年度は138名（70.8％）、平成26年度は162名（67.2％）もいた。仕事を継続する上で、自分の感じているストレスを把握することは必要である。

Q13.自分の感じているストレスを解消する方法を持っている。【ストレス解消力】

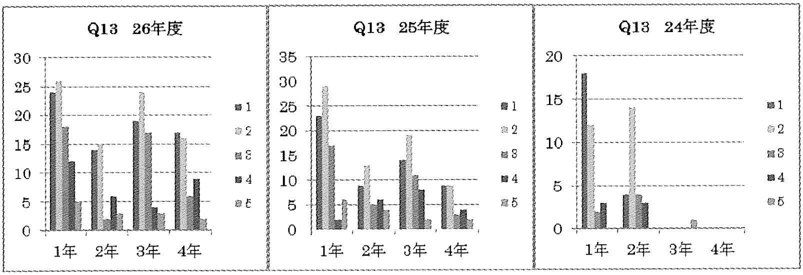


図5－13　ストレス解消力

どの学年も、「よく当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と回答とした学生がやや多く、全体で平成24年度は58名（82.9%）、平成25年度は125名（64.1%）、平成26年度は155名（64.0%）であった。自分の感じているストレスを把握し、そのストレスを解消する方法をもっていることは、これから仕事を続けるうえで、非常に大切なことである。

Ⅳ 実践活動における成功事例・失敗事例

1．成功事例

「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉学部卒社会福祉関係従事のつどい」

○実 績

今回のテーマは、「認め合い・共に育つ」であった。保育や福祉、医療での現場においては、対象者は異なるものの相手をよく理解し、ありのままを受け入れていくことから始まる。そこで様々な状況を直視しながら、各ニーズを掘り起こし、共に考え寄り添うことが求められます。自己実現をサポートしていく中で、共に成長することが重要である。

日　　時　２０１４年１２月６日（土）　１３時３０分～１８時３０分

〈開場１３時００分〉

会　　場　同朋大学　成徳館　５階　Ｊ５０２教室　他

日　　程

・１３：００～１３：３０　受付

・１３：３０～１４：３０　★第一部　基調講演

テーマ　『認め合い・共に育つ！』

講師　林　将司　氏（名古屋市立天白養護学校　教諭）

・１４：３０～１４：５０　★中神ゼミ発表　テーマ『若者の結婚観』

〈休　憩〉

・１５：００～１６：００　★ワークショップ（ＫＪ法による課題整理）

項　　目	運営担当者（所属）	活動報告者（所属）
①　分科会　児童福祉（児童養護）	森下真美（晴光学院）	藤本紗（慈友学園）
児童福祉（保育）	丹羽丈司（同朋大学社会福祉学部教授）	田島顕子（すみれ保育園）
②　分科会　高齢者福祉	松田耕治（さくらデイサービスセンター）	田澤奈緒（名東区南部いきいき支援センター）
③　分科会　障がい者福祉	山本久義（やまびこ福祉会）	谷村政貴（やまびこ福祉会）
④　分科会　地域福祉	森健一郎（小牧市社協）	金森大席（清須市社協）、森健一郎（小牧市社協）

・１６：１０～１６：５０　★各分科会からグループ報告、全体会、講評

○成　果

【基調講演】

・「障がい」に関してマイナスなイメージが多いように感じていた私たちは「障がい」について見方を変えると「強み」に変わってくるという考え方について学んだ。

・子ども同士が感謝の気持ちを伝えあったり褒められたりすることは、先生や親から褒めてもらうよりも嬉しく感じているようだという話があった。このお話を伺って、子ども同士で「認め合い」価値を見出しているからこそ生まれてくる気持ちなのだろうということを学んだ。

・お話を聴いて私が大切だと思ったことは「発想の転換」である。人は誰しもできないことがあると「これだけしかできない」と思い、怒られる場合もある。しかし、「こんなにもできた」と物事をプラスに考えることが大切であることを学んだ。

・私は、自分自身が身体障害を持って生まれたことにより、健常者の人

よりははるかに知的障害者を多くみてきた。知的障害者が苦手という気持ちはなかったが、自分からはかかわらずにいた。それは、どうかかわったらいいのか分からなかったからである。しかし、お話を聴き「かかわり方なんて考えることではないし、難しいことでもない」と感じた。

【分科会】

・私は自分自身が障害者ということもあり、障害者福祉分野で学んだ。障害者福祉のＫＪ法の議題は「デイサービスを拒んでいる重度障害者がいて介護者が亡くなったとき、その当事者さんがよい生活を送っていくためにはどうしたらいいか」というものだった。２グループに分かれて行い、私たちのグループは娯楽を中心にまとめていき、もう１つのグループは制度中心でまとめていた。同じテーマで考えたのにまったく違う視点での学びができた。

・ＫＪ法は一回講義で行ったことがあるため、そんなに難しくはなかった。ＫＪ法を使うことできれいに分かりやすくまとめることができ、便利であった。

２．失敗事例

「暴風雨警報発令時の実習継続」

平成26年度の同朋大学社会福祉学部での取組における事例をデータベース化してみると以下のようになる。今回の取組の過程で生じる失敗事例も以下のような分析の過程を経て共有される。

○事業名　インターンシップ「（３）実務実践型」社会福祉現場実習、保育実習　等

○事　象　台風が接近し、暴風雨警報が発令されていたが、実習が継続して実施されていた。

○経　過　暴風雨警報が発令され、実習担当教員がたまたま気になって実習

施設に連絡したところ、実習は継続されていた。施設の職員は暴雨風警報が発令されていたことを知らなかった。実習担当教員は電車等の公共交通機関が運転の見合わせとなると意見ないので、直ちに実習を中止し、学生（実習生）を帰宅させるように依頼した。このようなケースが複数見られた。

○原　因　（1）学生手帳「台風・交通機関ストライキ等の場合に授業についての措置」の記載が、施設側に周知されていなかった。

（2）教員、学務課、実習指導室の台風に対する措置の認識不足。

（3）学生への台風時の措置に関する指導不足

○対　処　（1）学務課、実習指導室より連絡がなされた。

○総　括　（1）台風時の措置への教員、学務課、実習指導室の理解、周知徹底が充分ではない。

（2）暴風雨警報発令の可能性を踏まえて、早めの対応をしないと混乱をまねく。

○知識化　（1）実習施設と教員・学務課・実習指導室が連携し、台風時の措置に関する仕組みを作る必要がある。

（2）実習の事前指導において台風時の措置に関する指導

Ⅳ　平成24～26年度事業評価

(1)平成24～26年度の活動成果

1)　失敗事例からの学び

平成24年度における福祉実践基礎力における学生のキャリアポートフォリオからの入力欠損という失敗事例をきっかけに、産業界（福祉現場）のニーズを福祉実践基礎力向上に反映させるために全教員がチャレンジした。主に下記の2）から5）に関してチャレンジした。

2) 産業界（福祉業界）のニーズを把握し、スムーズな就業につなげた

キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱ（授業科目）、産業界のニーズに対応した社会福祉教育（特別講義）において、社会福祉現場で働くOB・OGを中心として招聘した講師にアンケート調査を実施して産業界のニーズを把握した。これらを発展させ、3・4年生のゼミ（社会福祉専攻：社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、子ども学専攻：総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）において、ゼミ担当教員がゼミの学習内容を深めるために、社会福祉現場で働く実務家を招聘し、スムーズな福祉現場への就業につなげる一助とした。

3) 教員のアクティブラーニングを活用した授業の状況を把握し、福祉実践基礎力の高めた

教員のアクティブラーニングを活用した授業の実施状況の把握のために全教員に対するアンケート調査を実施し把握した。それに留まることなく、福祉実践基礎力を構築する初期段階として必要な技術的能力を身に付けるたまの社会福祉入門（改訂番）を全専任教員でチャレンジし、作成できたことは大きな成果であった。また、社会福祉入門の習得状況を把握するチェック・テスト（2013年度）を土台として、さらなる強化を図るからアセスメントテスト（2014年度）へと発展させた。

4)教員の育成したい資質を把握

教員にアンケート調査を実施し、どのような人材を育成したいのかを把握できた。

5)インターンシップ不参加学生の把握からさらなる強化へ

学務課と協力してインターンシップに参加していない学生を把握し、参加するようにするにはどうのようにしたらよいか検討した。その結果、一般企業へのインターンシップに参加する学生も見られるようになった。

(2)平成24～26年度の活動評価

1) アクティブラーニング／インターンシップの強化

①アクティブラーニングの対象科目の拡大

平成24年度当初は、1年生基礎ゼミ（社会福祉演習Ⅱ）、2年生演習（ソーシャルワーク演習Ⅱ、子ども演習Ⅱ）、3年生演習（社会福祉演習Ⅱ、総合演習Ⅱ）、4年演習（社会福祉演習Ⅳ、総合演習Ⅳ）が対象科目であったが平成26年度には「生活と福祉」「経済学概論」「心理学概論」など対象科目に拡がりが見られるようになった。

②インターンシップの対象科目

社会福祉現場実習、精神保健福祉現場実習、保育実習、教育実習、幼児教育実習、　ボランティア活動、インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

平成26年度末までの目標：

①テキスト『社会福祉入門』をもとに、1年生基礎ゼミ、2年生演習で課題を与えながらディベートやチェックテストなどによって福祉実践基礎力を習得と確認を行う。

②3年生演習と4年生演習で福祉実践基礎力のチェックテストによって習得状況を測定する。

③インターンシップの参加しない学生を0に近づける

平成24～26年度評価：3　－指標は以下の通り

1：目標に向かってスタートした－－福祉実践基礎力の測定値：平均3点

2：目標に近づいた－－福祉実践基礎力の測定値：平均2.5点

3：目標に達した－－福祉実践基礎力の測定値：平均2点

4：目標を上回った－－福祉実践基礎力の測定値：平均1点に近づく

（※測定値は1に近いほど良い）

2)　地域・産業界のニーズの把握と反映

平成26年度末までの目標：

①同朋大学社会福祉学部と関係する地域・福祉業界のニーズをアンケー

トや対話を通して把握する。

②同朋大学が把握したニーズと大学での対応状況を検討する

③地域・福祉業界のニーズと、教員の意識の差をもとに、教育改善策に関する対話を行う。

平成24～26年度における評価：3　―　指標は以下の通り

1：目標に向かってスタートした――地域・福祉業界のニーズを把握した。

2：目標に近づいた――地域・福祉業界のニーズと大学での対応状況とを把握した。

3：目標に達した――地域・福祉業界のニーズとの対話の成果をもとに、教員との対話を行い、教育改善策を策定した。

4：目標を上回った――教育改善策を実施した。

おわりに

本学部では、仏教精神の基づく同朋和敬（共なるいのちを生きる）を建学の理念として、幅広い理論、知識及び専門的技術を身につけ、併せて人格の陶冶と人類文化及び社会福祉に貢献する人間を養成することを目的として、その実現のための教育内容を編成している。そのような中で平成24年9月20日に、本学社会福祉学部は、文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に『前に踏み出し、考え抜き、チームで社会と結びつく教育力の成長』というテーマで、三重大学を幹事校として中部圏の23大学で応募したところ選定され、平成24年度から今年度（平成26年度）までの3年間取り組んで来た。

本報告でも述べたようにが、アクティブラーニングを活用した教育内容、地域・産業界との連携力の強化を図る中で、学生の福祉実践基礎力は平均点「２」が達成されたと考えられる。今後ますます学生の福祉実践基礎力が高

まっていくように、来年度以降はこれまでの事業の内容を再検討し、大学の自己資金等で継続しより以上に福祉実践基礎力を高めていきたいと思う。

幹事校、副幹校を中心に、連携校と取り組んできたが、連携することの大変さを感じながらも、そこからの学びも体験した。取組が軌道に乗り、特に幹事校、副幹校の教職員の皆様には深い感謝と敬意を表したい。

注記

1）アクティブラーニングとは、授業者が一方的に知識伝達をする従来型の講義形式ではなく、学生参加型授業、共同学習を取り入れた授業、課題解決型学習やPBL（Problem-Based Learning/Project-Based Learning）など、学生の能動的な学習をとりこんだ授業を総称するもの。

引用文献

1）平成24年度「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」申請書
2）同朋大学社会福祉学部　文部科学省平成25年度産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業『中部圏の地域・産業界との連携を通した教育改革力の強化』　～平成２５年度の実践報告書～,201４.
3）同朋大学社会福祉学部　文部科学省平成25年度産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業『中部圏の地域・産業界との連携を通した教育改革力の強化』　～平成２６年度の実践報告書～,2015
4）同朋大学社会福祉学会　「特集3実務家を招聘する科目～文部科学省産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業『S学会ジャーナル』Vol.16,p20-p33,2014.

参考文献

1）和木康光『同朋和敬　―　同朋大学のあゆみ　―』中部経済新聞

社,2002.
2）中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて（答申）』2008.
3）角方正幸・松村直樹・平田史昭（共著）『就業力育成論　実践から学ぶキャリア開発支援策』学事出版,2010.

謝辞
この実践報告をまとめるにあたり、産業界ニーズ委員会の委員の先生方をはじめ、社会福祉学部の教職員、学務部の教職員の皆様の協力を得た。ここに感謝の意を表します。

（本学社会福祉学部長、教授：カウンセリング論、ボランティア活動）